

美術って……

先日、大阪府枚方市にある**天門美術館**の平成 25 年度秋季特別展(平成 25 年 10 月 2 日から 10 月 27 日)へ行ってきました。

もっと早くお伝えするつもりでしたが、遅れているうちに特別展は間もなく終わってしまいます。本当に申し訳ありません。

タイトル

池田遊子と知られざる日本絵画展 —近代南画の世界—

観賞の後、館長とお話をしました。その時の内容をお伝えします。

《美術は身近なもの》

欧米と日本では文化に対する考えが違う、と館長はおっしゃいます。

歴史や自然が違うから当然と言えば当然なのですが、館長は“美術と生活の関わり度合”の違いを指摘されます。それは「絵や彫刻は美術館で見るものではない。」という言葉に表れます。



美術館に美術品を見に来て(場合によっては、入場のために列を作った)、見を終わった後に「あ～、疲れた。」と言って、家に帰る。これが文化的な生活でしょうか？

美術品を身近に置いて、日々の生活の中で眺めてこそその美術です。

美術館の中でもそうです。

誰かが美術品を美術館へ寄付したとします。美術館はありがたく頂戴し、保管します。

しかしながら、展示方針に合わない、一般受けしない、作者が知られていない等の理由で、倉庫に保管されたままの作品が非常に多くあります。

「死蔵品」

人の目に触れてこそその美術。

大事にしまっておいても、その作品に価値はありません。

《美術の大学教育》

このごろの美術に関する大学教育では、作品を「作りなさい。」と指導されるそうです。この言葉だけでは、特に違和感を持ちませんが、その背景には基本的な技術を教えない(教えられない)ことがあると聞くと、「えっ!」と思います。

感性を重視される教育の成果なのか、「自分に理解できないものが悪い。」と考える学生が多数になっているそうです。

そうすると、自分に目を向けることはありません。自分の知識のなさを反省することはありません。知識を得るために勉強することはありません。ひいては、“すべて人が悪い”ことになってしまいます。

館長からの受け売りなので、しっかり理解しているわけではありませんが、具体的に言います。

南画は中国の南宋画に由来しており、画の中に書が記されています。つまり、漢詩です。画と書が一体となって表現される技法なので、どちらかの知識が欠けると作品を完全に理解したことにはなりません。しかしながら、漢詩、漢文がわからないので無視をする。あるいは、漢文は読めるが画のことはわからない。

素人なら、それでも構わないと思います。「きれいだなあ。」「すごいな。」だけでも……。

今、話題にしているのは、絵を専門的に勉強しようとする学生なのですから、「自分に理解できないのは、作品が悪いからだ。」という発想は、自己の存在意義を問うことになるのではないかと思うのです。

これは、きっと美術界だけの話ではありません。ストレスの多いこの現代、一般社会にもあてはまるのではないかと思います。

普段は、いろいろなことに気を使いながら身構えて生きています。ところが、自分が優位に立つ限られた環境下では、驚くほど横柄な振る舞いをしてしまうことはないか。

“タクシー運転手や電車の車掌に暴力を振るう客”

先ほどの美術学生と同じようなニオイを感じるのは、私だけでしょうか。

そう考えると、大学で美術を教える先生とは、いったい誰なのでしょう？

専門知識や技能があるから指導する立場になると思います。技能がなく知識だけということとは、評論家です。知識がなくても技能があれば、作家です。

もっと言えば、大学で教えるべき美術とは、何でしょうか。

正直、わからなくなってきました。

《美術の価値・評価》

制作された美術品の価値をどう計るか、どう評価するかは、難しい問題です。

作品を見た人、買った人の反応についての館長の言葉です。

「5千円の作品は大事にしない。1,000万円の作品には振り向かない。100万円の作品を大切に
にする。」

普通の人には、作品の本当の価値はわかりません。“買った値段”を尺度に価値を判断します。

以前、ブログ記事にしたことがありますが、これは普遍的な問題でもあります。

(こちらから、どうぞ)

[自分で判断していますか？](#)

会計上の評価も、同様の問題があります。

企業(法人)の財政状態を示すために、貸借対照表を作成します。

企業(法人)の持っているもので資産価値のあるものは、「資産」として貸借対照表に計上されます。

しかし、金額換算できなければ貸借対照表には計上されません。なぜなら、金額ゼロとして載せるわけにはいきませんから。ゼロではないにしても、「いくらが妥当なのか」という評価の問題は、本当に難しい問題なのです。

会計理論上、さまざまな考え方があります。美術品を念頭におけば、「いくらで売れるか」という考え方で評価するわけですが、それは誰にもわからないのです。売れてみなければ。

有名な作者の有名な作品は、簡単に評価できます。

以前のブログ記事に書いたとおりだからです。

世の中の大半の作品は無名です。

それを会計的に評価することは、非常に難しいのです。



館長とは、美術以外に経済や政治についても語り合いました。

有意義なお話相手が見つかりました。

また、[天門美術館](#)にお伺いするつもりです。